

歴文 夏季特別企画

高野山の歴史散策

平成26年7月14日(月)～15日(火)

講師：柴谷宗叔氏

7/14(月)

- 15時30分 宿坊『無量光院』に集合(宿坊に荷物を置く)
講師の案内で檀上伽藍(金堂・根本大塔、御影堂など)の見学
17時～ 宿坊にて、講師を囲んで説明と懇談、質疑応答など
18時～ 夕食(講師も同席されます)
20時～ 自由時間

7/15(火)

- 6時～ 早朝勤行に参加(声明、読経、護摩焚き、説法等)
8時 朝食
9時 出発
講師の案内により、徒歩にて『一の橋』を經由して『奥の院』へ。
院の境内を散策、『奥の院御廟』を拝観、『中の橋』まで歩く。
12時頃 近くのレストランで昼食、解散。(バス停は『奥の院前』)
(添付地図をご参照ください)

《交通の案内》

電車の場合

- (往路) ①南海線 難波13:34発こうや7号(特急)⇒極楽橋着14:58
高野山ケーブル14:58発⇒高野山着15:03⇒バス15:09発高野警察前下車
②南海線難波13:00発(快速)⇒極楽橋着14:36
高野山ケーブル14:42発⇒高野山着14:47⇒バス15:09発 高野警察前下車

(復路) バス停「奥の院前」13:07発に乗車

- ①高野山13:38発⇒極楽橋13:49発(快速)⇒難波15:23着
②高野山15:29発⇒極楽橋15:40発(こうや8号)⇒難波17:02着

マイカーの場合(別添の高野山案内地図をご参照)

大門横より高野山へ⇒金剛峰寺前を経て⇒千手院を左折⇒高野警察の手前が無量光院

《宿泊料等》

- ・宿泊費10000円、諸費用(講師謝礼など)1000円、寺社拝観料約2000円

合計13000円・・・(当日集めます)

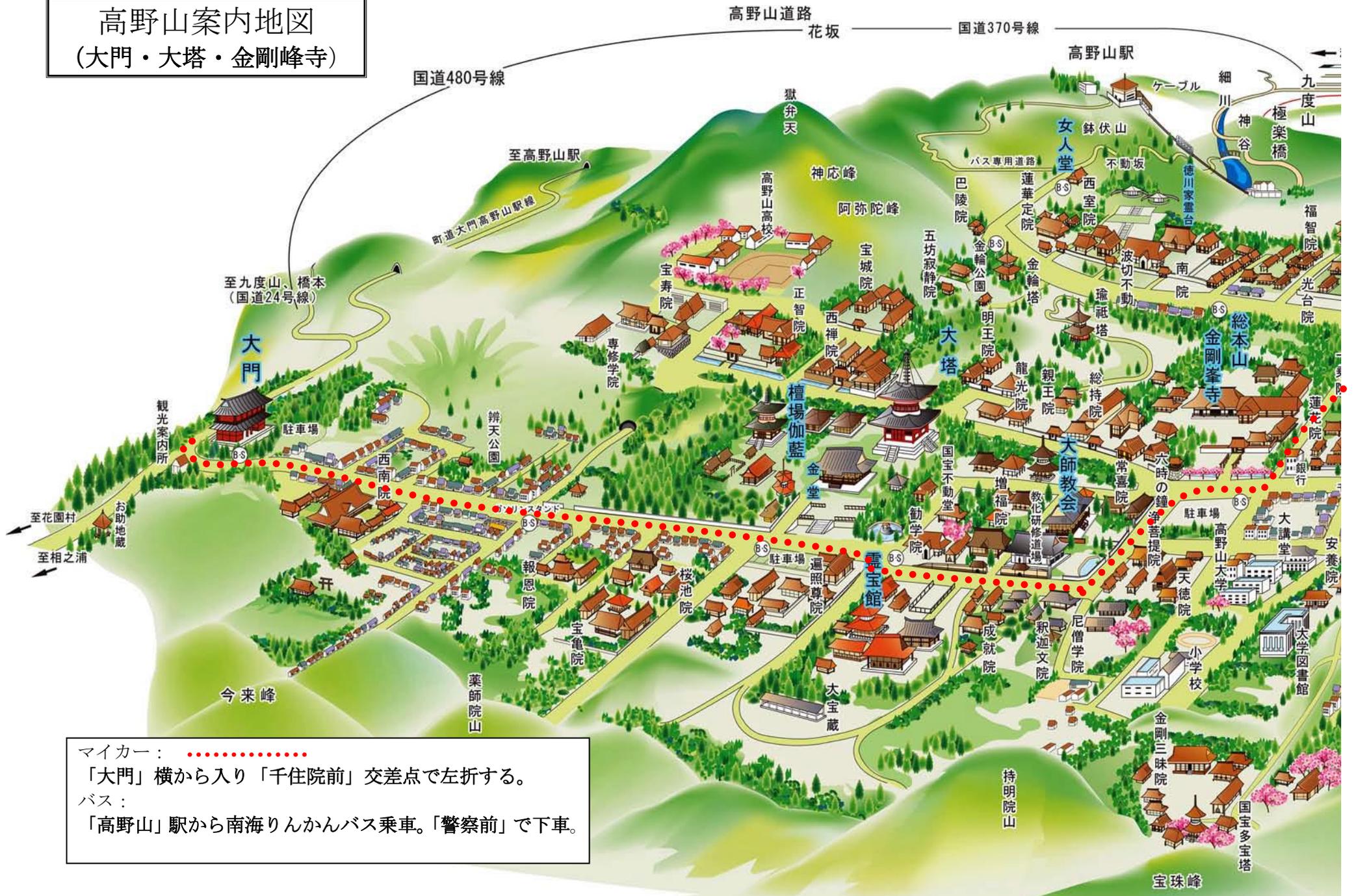
- ・7/15の昼食は各自でお支払ください。

- ・お願い：この料金は、20名の団体割引を前提にしていますので、万一キャンセルされる場合には、代替りの人をお手配いただくようご協力をお願いします。

担当世話人：川井秀夫 森英雄 古川祐司

(連絡先：事務局 0742-44-8621、当日携帯 090-4298-2344)

高野山案内地図 (大門・大塔・金剛峰寺)



マイカー：
 「大門」横から入り「千住院前」交差点で左折する。
 バス：
 「高野山」駅から南海りんかんバス乗車。「警察前」で下車。

国道370号線

高野山案内地図 (金剛峰寺・宿坊)

警察前バス停
で下車

宿坊無量光院

奥の院へ

- 転軸山森林公園
- ・ログハウス
 - ・多目的広場
 - ・シャクナゲ園
 - ・ゲートボール場
 - ・学習展示場
 - ・林業センター 他

マイカー：
「大門」横から入り「千住院前」交差点で左折する。

バス：
「高野山」駅から南海りんかんバス乗車。「警察前」で下車。



高野山奥の院

転軸山

奥之院
弘法大師御廟

一切経蔵

記念燈籠堂

納骨堂

祈親上人靈屋

仙陵

陸奥宗光の供養塔

織田信長供養塔

みろく石

御廟の橋

近衛家歴代の供養塔

英照皇太后の宝塔

春日局の供養塔

御供所

日本最古の歌碑率塔婆

豊臣家墓所

越前松平家石廟

仏号板碑

円光大師供養塔

宗源院供養塔

江戸焼死者追悼碑

姿見井戸

高麗陣敵味方供養塔

長州毛利家の供養塔

密厳堂

見真大師靈屋

参道

中の橋案内所

中の橋会館

中の橋大駐車場

玉川

高野山大霊園

高野龍神

高野山

千姫の供養塔

一番石塔

江戸焼死者追悼碑

姿見井戸

高麗陣敵味方供養塔

長州毛利家の供養塔

密厳堂

見真大師靈屋

参道

中の橋案内所

中の橋会館

中の橋大駐車場

玉川

高野山大霊園

高野龍神

高野山

上杉謙信、景勝の靈屋

井伊掃部頭の靈屋

羽後秋日佐竹の靈屋

薩摩島津家の靈屋

法明上人供養塔

曾我兄弟と父可津三郎の供養塔

大岡家供養塔

武田信玄、勝頼の墓碑

七代藩主宗将の供養塔

紀伊徳川家

大師腰掛石

伊達政宗の供養塔

石田三成の供養塔

明智光秀の供養塔

法明上人供養塔

曾我兄弟と父可津三郎の供養塔

大岡家供養塔

武田信玄、勝頼の墓碑

七代藩主宗将の供養塔

紀伊徳川家

大師腰掛石

伊達政宗の供養塔

石田三成の供養塔

明智光秀の供養塔

一の橋

関東大震災横死者の供養塔

大岡家供養塔

武田信玄、勝頼の墓碑

七代藩主宗将の供養塔

紀伊徳川家

大師腰掛石

伊達政宗の供養塔

石田三成の供養塔

明智光秀の供養塔

伊達政宗の供養塔

中の橋

汗かき地蔵

密厳堂

見真大師靈屋

参道

中の橋案内所

中の橋会館

中の橋大駐車場

玉川

高野山大霊園

高野龍神

高野山

371

至橋本

高野山の歴史

「高野山名所図会」
より抜粋しました

開創以前 の高野

古代、高野山の麓、丹生川流域の高野・天野一帯には「丹生（にう）氏」と呼ばれる人々が住んでいました。「丹生氏」は彩色に使われた朱の原料となる「丹（辰砂）」に関わった人々です。中央構造線沿いなど、水銀鉱床があった場所に住み、丹の産出を行なっていました。今でも全国各地に「丹生」という地名や「丹生神社」が残っています。

丹を製錬して水銀を作る技術を持つ秦氏が大陸から渡ってきてからは、丹の生産の主役は秦氏となり、丹生氏は産出を司る神、丹生都比売神（にうつひめのかみ・通称「丹生明神」）を祭祀する神官となったと考えられています。

弘法大師・空海は若い頃、高野山の辺りで山岳修行をしていましたが、この丹生氏と何らかの関係を持っていたようです。唐に私費留学をすることができた背景にも、丹生氏の援助があった可能性が指摘されています。

高野山の開創伝承

高野山の開創について、平安中期に書かれた『金剛峯寺建立修行縁起』には、以下のような伝承が伝わっています。

- ・弘法大師は唐から帰国する際、真言密教の修行にふさわしい場所を求めため、三鈷杵と呼ばれる法具を投げた。三鈷杵はたちまち雲にのって日本へ飛んでいった。
- ・帰国した弘法大師が三鈷杵を探して歩いていたところ、大和国宇智郡（現在の奈良県五條市）で、二匹の犬を連れた「南山の犬飼」という狩人に出会い、「少し南の山中で、夜な夜な光を放つ松がある」と教えられた。弘法大師が狩人が放った犬について行くと、紀伊国の天野（現在の和歌山県かつらぎ町）で土地の神、「丹生明神」が現れた。実は「南山の犬飼」は、「丹生明神」の子である「狩場明神（高野御子大神）」の化身だった。
- ・「丹生明神」は、「菩薩が私のところに來られたのは幸せです。この山を全てあなたに献上します」と言って、高野山を弘法大師に譲った。
- ・高野山に登った弘法大師は、広い野原に出た。そして、あの三鈷杵が松の枝にかかっているのを見つけた。弘法大師は「蓮の花のような山々に囲まれたこの地こそ、真言

密教の修行にふさわしい。まさに私の求めていた場所だ」とんだ。早速ここを根本道場に定め、山の上に伽藍を造り、そこに丹生明神と狩場明神も祀った。

高野山の開創と歴史的背景

延暦 23 年（804 年）から大同元年（806 年）まで唐に留学し、密教の奥義を学んだ空海は、唐の情報を伝えることで嵯峨天皇との交流を深めていました。

大同 5 年(810 年)、嵯峨天皇は兄の平城上皇と平城京への還都をめぐる対立し、ついに平城上皇が挙兵を図りました（薬子の変）。嵯峨天皇は征夷大將軍・坂上田村麻呂に命じてすばやく挙兵を阻止し、内戦は未然に防ぐことができましたが、実の兄が内乱を起こしたことで、心に深い傷を負いました。空海はこの事件で嵯峨天皇方に立って活躍（嵯峨天皇の勝利を祈念し、平城上皇方の藤原仲成・薬子らを調伏）、乱が収まった後は大々的に国家鎮護の祈禱を行いました。この薬子の変によって、嵯峨天皇の空海に対する信任は更に厚くなっていきます。

弘仁 7 年（816 年）、空海は密教修行の道場を作るため、嵯峨天皇に高野山の下賜を請います。下賜はすぐに叶えられ、空海は弟子を派遣して開創に着手しました。弘仁 9 年（818 年）から翌年にかけては空海自身も高野山に滞在し、金剛峯寺の建立を始めました。

弘仁 14 年（823 年）に空海は京都・東寺も賜り、密教布教の拠点とします。これ以降、深山の高野山と都の東寺は真言宗の二大中心地として互いに関わりあっていくことになります。

承和 2 年（835 年）、空海は高野山で入滅しました。金剛峯寺の建立はまだ中途でしたが、弟子の真然が中心となり、887 年に根本大塔などの伽藍を完成させました。

衰退と再興の歴史

空海入滅後、金剛峯寺（高野山）や東寺、高雄山寺（神護寺）などの真言宗諸寺はそれぞれ独立した寺院としての道を歩み始めました。しかしやがて、金剛峯寺と東寺のどちらを本寺とするかという論争が起きます（本末争い）。

この争いは、東寺長者と金剛峯寺座主を兼ねた観賢（八五四～九二五年）が東寺を本寺とし、金剛峯寺を末寺と決めたことで決着し、金剛峯寺は負けた形となりました。

正暦 5 年（994 年）、高野山は落雷による火災でほとんどの伽藍を焼失しました。衰退が始まっていた金剛峯寺に再建する力はなく、僧は去り、高野山は荒廃します。

高野山を再興したのは、法華経の持経者（聖）だった興福寺の定誉（958-1047）です。長和 5 年（1016 年）、観音像のお告げで高野山に登った定誉は、冬の寒さを防ぐ方法を編み出し、僧侶たちを山内へ呼び戻すなど、金剛峯寺の復興につとめました。

大師信仰の拡大

高野山との主導権争いに勝利した東寺の長者・観賢は、延喜 21 年（921 年）、朝廷に働きかけて空海への弘法大師号宣下を実現させました。空海が「弘法大師」と呼ばれるようになったのはこれ以降です。

観賢は、諡号宣下の勅書と醍醐天皇の賜衣を奉じて高野山に乗り込み、大師号の報告会を行いました。『日本紀略』には、観賢が報告のため奥の院の廟所を開けたところ、空海の顔色は生前のままだったと記されています。この話が伝わり、空海は実は亡くなって茶毘に付されたわけではなく、御廟の中で「入定（にゅうじょう）」していると信じられるようになりました。

弘法大師の入定信仰は観賢の弟子たちによって広まりました。そして、山科・曼荼羅寺（後の随心院）を建立した仁海（951－1046）の働きかけにより、時の関白・藤原道長の高野山参拝が行われました。これがきっかけで、藤原氏が空海に帰依するようになり、その保護を受けて寺領も増え、高野山は次第に活気を取り戻していきます。

その後入定信仰は貴族から民衆に至るまで広く信仰を集め、高野山は現世の浄土とされました。布教の原動力となったのは、「高野聖」と呼ばれる念仏僧たちです。彼らは諸国を巡り、津々浦々で弘法大師の奇跡を語りました。同時に、高野山への納骨を勧め、伽藍再建のための寄進を求めました（勧進）。高野聖たちが伝えた数々の弘法大師伝説は、今も全国各地に語り継がれています。空海自身がそうだったように、彼ら自身も土木や医療などの最新技術を伝え、それが人々の目には奇跡とうつり、民衆の心をつかんだとも考えられます。

平安末期には白河上皇や鳥羽上皇も高野山に参詣しました。12世紀中盤には平清盛が根本大塔を再建。その際に、自らの血を絵の具に混ぜた「両界曼荼羅図(りょうかいまんだらず、別名・血曼荼羅)」を寄進したと伝わっています。

武士の台頭と高野山

平安末期に台頭した武士たちも、高野山を特別な聖地として崇めました。西行や熊谷直実を始めとして、現世を儚んで出家し、高野山に入った武士は枚挙に暇がありません。

鎌倉時代には、北条政子が源頼朝のために金剛三昧院を建立するなど、有力者の寺院建立が相次ぎました。堂舎の数は二千を数え、高野山は最盛期を迎えます。参詣道に町石が立てられ、町石道が整備されたのも鎌倉時代です。

戦国時代にも、錚々たる武将たちが高野山にやってきました。若き日の長尾景虎（後の上杉謙信）は家臣たちの争いに嫌気が差して突然出奔し、高野山に入って出家しようとしています。北条氏直や真田昌幸・信繁（幸村）父子も、戦いに敗れ、高野山に配流されました。

武士と高野山との関わりは、精神的な側面から捉えることもできますが、高野聖が高度な技術集団だったこととも、おそらく無縁ではないでしょう。

織豊政権と高野山

高野山は比叡山と同じように、独自の武力を蓄えていました。寺領は17万石以上あり、3万6千の兵を養っていたと記されています。そのため、天下統一を目指す織田信長にとっては邪魔な存在となりました。信長に叛いた荒木村重の家臣を匿い、信長の引渡し要求に応じなかったことをきっかけに、対立が深まります。天正9年（1581年）、信長は三男の信孝に14万の兵を率いさせて高野山攻めを開始。しかし翌年に本能寺の変が起きたため、攻略は中止されました。

信長を継いだ羽柴秀吉も紀州攻めを行い、根来寺を焼き討ちにしますが、高野山の客僧だった木食応其が和議を仲介し、高野山は攻略を免れました。秀吉はその後、金堂や大塔を再建するなど、高野山の復興を援助することになります。

木食応其は豊臣政権と深く関わり、高野山内に秀吉の母・大政所の菩提所「剃髮寺（のちに青巖寺と改名）」と「興山寺」を開基。そして文禄3年（1594年）には、秀吉が徳川家康や前田利家を連れて高野山に参詣し、連歌の会を催しました。一方で文禄4年（1595年）の秀次事件では、青巖寺で豊臣秀次の切腹が行われています。

江戸時代

徳川幕府も、高野山を菩提所と定め、2万1千石の寺領を保証しました。諸大名も競うように高野山に供養塔を建立し、奥の院の参道沿いには無数の石塔が立ち並びました。庶民の間では「講」を利用した高野山詣が盛んになり、奥の院には無数の小さな供養塔も納められました。

木食応其が開基した青巖寺と興山寺は、宗務を行う「学侶」と政務を行う「行人」の代表院となりました。一方で幕府の厳しい統制下にも置かれ、宝性院と無量寿院の門主には江戸への参勤交代が義務づけられました。

明治時代以降

明治政府の神仏分離政策により、寺社が一体となっていた高野山は再編制を迫られました。

明治元年（1868年）学侶、行人、聖の三派が廃止されました。翌年には青巖寺と興山寺が合併して真言宗の一寺院となり、高野山全体の寺号だった「金剛峯寺」を称します。寺領や寺有林も政府に返上し、経済的地盤も失いました。

明治5年（1872年）には女人禁制が解かれました。

明治21年と昭和元年には大火災が発生し、創建当時からの諸仏の多くを失います。しかし昭和7年に金堂が、昭和12年に根本大塔が再建されました。

昭和21年（1946年）、大真言宗から高野山真言宗として独立。昭和27年（1952年）、宗教法人に認証されました。

弘法大師（空海）の足跡

「高野山名所図会」
より抜粋しました

空海について

真言宗の開祖であり、高野山を開創した空海は、日本の仏教史上最大級の宗教家です。真言宗の信徒に限らず広く敬われ、親しみをこめて「弘法さん」「お大師さん」と呼ばれてきました。「弘法大師」とは、入滅から 86 年後に醍醐天皇が贈った諡号（しごう、死後に贈る美称）です。

空海が活躍したのは、平安時代の初期のことです。時代の転換期にあって、唐から密教のみならず最新の技術・学問をもたらし、時の権力者たちとも密接に関わり、新しい時代の精神的支柱を築き上げました。

少年時代

空海は宝亀 5 年（774 年）、讃岐の豪族・佐伯田公（さえきのたぎみ）の次男として、今の香川県善通寺市で誕生しました。

15 歳の時、長岡京に上京し、叔父の阿刀大足（あとのおおたり）に論語など漢籍（漢文の書籍）を学びます。

18 歳になると当時官吏養成の最高機関だった大学寮の明経科（みょうきょうか）に入学し、引き続き漢籍を学びました。

修行時代

20 歳になった頃、空海は大学を中退し、仏門の道に入ります。

「空海僧都伝」によると、大学では昔の人の搾りかすのようなものしか学ぶことができず、まったく役に立たないとの考えからだったようです。

当時は正式な僧侶になるには官許が必要だったため、私度僧（自称の僧侶）として修行を始めました。

旅の行者から「虚空蔵求聞持法」を授かり、四国で求聞持法を修行したと伝えられています。

・虚空蔵とは知恵や記憶に利益をもたらす菩薩で、求聞持法とは真言（翻訳されてい

ない仏の言葉)を、一定の作法で100日間かけて100万回唱えるという修法です。

『三教指帰』には、空海が室戸岬の洞窟で求聞持法を修めるうちに、明星が口に飛び込み、悟りを開いた(求聞持法を会得し、無限の智慧を手に入れた)と記されています。そこから見えるのは空と海だけだったため、空海と名乗ったそうです。

若き日の空海は、吉野の金峰山や四国の石鎚山などで山林修行を重ねたようですが、はっきりしたことは分かっていません。しかし、この頃の空海の足跡を弟子たちが辿ったのが、「四国八十八ヶ所」のお遍路の原型とされています。

唐への留学

延暦23年(804年)、31歳になった空海は遣唐使に選ばれ、渡航の直前に東大寺戒壇院で得度受戒しました。この時、ようやく正式に出家し、正規の僧侶になったのです。

自称の修行僧だった空海が遣唐使に選ばれた経緯についてはよく分かっていませんが、いずれにせよ空海は正規の留学僧となり、20年滞在する予定で唐に渡りました。同じ遣唐使のメンバーには、後に天台宗の開祖となった最澄、空海や嵯峨天皇と共に三筆と称されたものの、藤原氏との政争に敗れて失脚した橘逸勢(たちばなのはやなり)などがいます。

長安に着いた空海は、金剛頂経・大日経という2系統の密教を統合した第一人者であり、皇帝からも師と仰がれていたインド僧の恵果(えか)に師事します。恵果は空海に、胎藏界・金剛界・伝法など密教の全てを教え、灌頂(かんじょう、戒律や資格を授けて継承者とする儀式)を授けました。そしてその4ヶ月後に亡くなります。空海は、密教の8代目の正当な後継者となりました。

死を目前にした恵果が、1000人以上の弟子の中から空海を継承者とした理由としては、空海の才能に着目したということもあったのですが、唐では真言密教の衰退が始まっていたため、新天地である日本での密教の発展を願っていたためとも考えられます。

恵果の入寂後、空海は越州(現在の紹興)に移り、土木技術や薬学など様々な分野の学問・技術を学んでいます。

延暦25年(806年)8月、遣唐使判官の高階遠成の遣唐使船に便乗し、帰国の途につき

ました。20年の予定に対しわずか2年間の留学となりましたが、その成果は大きく、空海は自ら「虚しく往きて実ちて帰る」と語っています。

闕期の罪

無事に帰国した空海ですが、留学期間を早く切り上げすぎたため、「闕期（けっき）」という罪に問われます。長期滞在の留学生（るがくしょう）として派遣された空海は、本来であれば次の遣唐使（20年後）まで帰ることは許されませんでした。

空海は、持ち帰った教典や仏具の目録を朝廷に提出し、「これだけ貴重なものを持ち帰り、新たな知識を日本で広めるために、少しでも早く帰りたいのだ」と弁明します。

それでもすぐに許しは出ず、空海は3年にわたって太宰府や和泉に留まることとなります。時の帝・平城天皇が仏教に興味を示していなかったこととも関係があると言われます。ようやく入京が許されたのは、平城天皇が退位し、嵯峨天皇が即位した大同4年（809年）のことでした。

空海と最澄

京に入った空海は、高雄山寺（今の神護寺）の住職となります。高雄山寺は和氣清麻呂が開基した和氣氏の氏寺です。和氣氏は当時、天皇の側近として権勢を誇っていました。

和氣氏はこれ以前に最澄の庇護者ともなっており、高雄山寺の住職もそれまでは最澄が務めていました。最澄（伝教大師・767年～822年）は、天台宗の開祖で、空海と並ぶ平安仏教の巨人です。

- ・最澄は12歳で出家し、17歳で度縁（どちょう・正式な僧侶の証明書）の交付を受けています。長い間（国家から見て）自称の僧侶に過ぎなかった空海とは対照的に、仏教界のエリートでした。
- ・延暦7年（789年）、比叡山に小さな草庵（一乗止観院または比叡山寺、後の延暦寺）を作り、修行に明け暮れていたところ、平安京の造営にとりかかった桓武天皇の目に止まります。比叡山は新しい都の鬼門の方角にあるため、そこを護る国家鎮護の寺を必要としていたためです。
- ・更に最澄は、官僚化した南都（奈良の平城京）の僧侶たちに批判的だったため、奈

良仏教の政治介入を排除するため遷都に踏み切った桓武天皇にとっては最高の人材でした。

- ・そのため桓武天皇は最澄に帰依し、比叡山寺は官寺となります。桓武天皇の側近、和気広世も最澄を積極的に支援しました。広世の父、和気清麻呂が奈良仏教の「怪僧」道鏡によって辛酸をなめさせられたこともあり、和気氏も奈良仏教からの脱却を求めていたのです。
- ・そして延暦 23 年（804 年）、空海と同じ遣唐使船（ただし、乗った船は別でした）に乗って唐に渡ります。空海が長期の留学生（るがくしょう）だったのに対し、最澄は短期で帰って来られる還学生（げんがくしょう）という特別な待遇でした。
- ・唐に着いた最澄は天台山に登り、天台教学を学びました。漢語はできなかつたため、弟子の義真に通訳をさせています。正統天台の付法と大乘戒を受けた後、帰りの船の出発を待つ 1 ヶ月半を利用して密教も学びましたが、密教を身に付けるには期間が短すぎました。
- ・帰国すると、桓武天皇は最澄が本格的に学んだ天台宗ではなく、ついでに持ち帰った密教の方に興味を示しました。（最澄の没後、天台宗にも密教が取り入れられますが、本来の天台宗に密教的要素はありませんでした）
- ・桓武天皇はかつて、藤原氏と組んで政敵の他戸親王、井上内親王、早良親王などを死に迫りやることがあり、その後都で発生した怪奇現象は彼らの怨霊によるものだと考えていました。密教には呪術的要素があるため、桓武天皇は密教で怨霊を鎮めることができるのではと、期待をかけたのです。
- ・桓武天皇は延暦 25 年（806 年）に亡くなりますが、朝廷はその後も怨霊を恐れ、密教を求め続けます。しかし最澄の密教についての知識は中途半端なものだったため、当惑します。

そんな時に、密教の正統な後継者となった空海が数々の貴重な教典とともに帰国してきたのです。朝廷に重用されてきた最澄に対し、空海の身分ははるかに低いものでしたが、最澄は密教については空海の方が長じていると認め、空海に対して弟子の礼をとり、高雄山寺住職の地位も譲りました。

空海が持ち帰った教典や法具の価値が認められ、闕期の罪が許された背景にも、最澄の尽力があった可能性が指摘されています。和気氏も、空海を最澄と同じように庇護するようになりました。

しかしやがて空海と最澄の仲は決裂し、二人は別の道を歩むこととなります。

- ・書を借りようとした最澄に空海が「行を修めず、いたずらに字面だけで密教を知ろうとすべきではない」と拒絶したことや、最澄が派遣した弟子が空海に師事してしまい、最澄のところに戻ってこなかった話が有名ですが、最大の原因はやはり教義の違いにありました。
- ・最澄が説いたのは、「道はそれぞれでも、精進すれば誰でもいつか仏になれる」という「法華一乗」。それに対し空海は、「世界の有り様全てが仏であり、それをあるがままに受け入れ、同調していけば、現世がそのまま浄土となる」という「密厳浄土」を説きました。
- ・「法華一乗」は輪廻が循環するうちにいつかは成仏できるという意味であるのに対し、空海の教えは現世にいながら、生きたまま成仏できるとし、現世を強く肯定したのです。

空海と嵯峨天皇

高雄山寺に入った空海は、ほどなくして嵯峨天皇と深い交流を持つようになります。嵯峨天皇は後に、空海や橘逸勢と並んで「三筆」に数えられるほどの書の達人でした。そのため、空海が唐から持ち帰った書にも強い関心を示し、空海自身にも、屏風への揮毫などを頼みました。

この頃、嵯峨天皇は平城京への還都（都を平城京に戻すこと）を求める実兄の平城上皇との対立に頭を悩ませていました。嵯峨天皇は、兄を唆しているのは側近の藤原菓子や藤原仲成だと考え、彼らを密教で調伏して欲しいと空海に依頼します。

翌年の弘仁元年（810年）には、嵯峨天皇は空海を南都・東大寺の別当に大抜擢しました。東大寺を頂点とする南都仏教勢力は、南都の復活を目指す平城天皇側につく恐れがありました。嵯峨天皇はそのトップに空海を送りこみ、その知恵と対応力で味方につけようとしたのです。

南都仏教勢力側も、最澄に対しては強い反感を持っていたものの、奈良仏教に批判的ではなかった空海は喜んで受け入れました。空海を支持することで、最澄の影響力を相対的に弱めようと考えていたためです。

追いつめられた平城上皇と藤原薬子、藤原仲成は、ついに東国での挙兵を企てました。通称「薬子の変（平城太上天皇の変）」です。

嵯峨天皇は征夷大將軍・坂上田村麻呂に出兵を命じる一方で、空海に勝利の祈禱を依頼しました。素早い対応が功を奏し、藤原仲成は射殺、藤原薬子も自害し、平城上皇の挙兵は未然に防がれます。平城上皇は出家しましたが、関係者には寛大な処置がとられました。

多くの血を流すことなく難局を乗り切った嵯峨天皇は、空海の調伏や祈禱、そして東大寺別当としての働きが大きかったと信じました。

その後空海は高雄山寺に戻り、全山を挙げて大がかりな天下泰平の祈禱を開始します。嵯峨天皇は強く感動し、空海に対する信頼と尊敬は動かぬものとなりました。

高野山開創

弘仁6年(815年)頃、『弁頭密二教論』を著し、独自の真言密教を確立した空海は、その集大成のため、若いころに修行した高野山に道場を作ろうと考えるようになります。

翌年、弘仁7年(816年)、空海は嵯峨天皇に高野山造営の願いを届出しました。嵯峨天皇は快諾し、異例の早さで空海に高野山が下賜されます。

このように天皇の全面的なバックアップを受けていた空海ですが、最澄の比叡山のように都の近くではなく、遠く離れた紀伊の山奥を選んだのは、国家権力とある程度の距離を保つためだったと考えられます。権力とは移ろいやすいものであり、空海は権力者に近づきすぎることの危険性も感じていたはずです。

天皇の許可が下ったとは言っても、当時、高野山の辺りは天野で祀られている丹生都比売大神（にうつひめのおおかみ）の神域であり、丹生一族が領していました。しかしこの丹生一族も空海を歓迎し、帰依したと考えられています。「空海は狩場明神の案内で丹生明神に会い、高野山を譲られた」という高野山の開創伝説がそのことを象徴しています。

- ・丹（辰砂、硫化水銀）を扱う丹生一族にとって、水銀の精錬などに通じた空海は憧れの存在だったのかも知れません。そもそも空海が高野山を道場の場所を選んだ理由の一つは、唐に渡る以前から交流があり、おそらく支援も受けていた丹生一族の

土地だったことだと思われます。

空海は早速、弟子の実恵（じつえ）や泰範（たいはん）を天野と高野山に派遣し、伽藍造営の下準備にとりかかりました。ちなみに泰範は最澄の愛弟子で、その後継者とも目されていましたが、最澄と袂を分かち空海の弟子になった人です。

空海自身が高野山に入ったのは、弘仁 9 年（818 年）のことです。そして、今の根本大塔の辺りで、密教の作法で結界を作り、諸魔を排除し、地鎮を行いました。そして丹生一族の神である丹生明神、狩場明神を勧請します。空海は密教の伝統に則り、土着の信仰を取り入れることをまったく厭いませんでした。高野山は神仏習合の霊場としてスタートしたのです。

満濃池のダム造営

高野山の造営を開始したとはいえ、空海自身はずっとそこに留まったわけではありません。弘仁 10 年（819 年）に伽藍建立に着手した空海は都に戻り、引き続き高雄山寺の運営や東大寺の密教化、宮中での公務、著述・編纂などに携わります。

弘仁 12 年(821 年)、空海は故郷・讃岐での大掛かりな土木工事も指導しています。灌漑用水の満濃池が決壊したため、これをアーチ型のダムに造り替えたのです。

空海は讃岐中から人を集めさせ、密教の修法で工事の成就を祈り、2 ヶ月で完成させたと伝わっています。もっとも、工事の全てを空海が指導して 2 ヶ月で完成させたわけではなく、決壊を防ぐために最も重要な堰の工事で、唐で学んだ土木技術が生かされたと考えるのが自然です。

東寺別当

弘仁 14 年、退位を目前にした嵯峨天皇は空海に東寺を与え、国家鎮護の寺に相応しい寺にして欲しいと依頼します。

桓武天皇が平安京を造る際に建立させた東寺には、平安京の左京（東側）を護る王城鎮護の役割と、東国を護る国家鎮護の役割を持っていましたが、未だ伽藍は未完成でした。

空海は嵯峨天皇の願いに応え、東寺で講堂や五重塔の建立に着手します。講堂の設計

では、須弥壇の上に金剛界の五仏と五菩薩、五大明王、四天王、梵天、帝釈天という21の彫像が並び立つ立体曼荼羅で、仏による国家鎮護を体現化。五重塔も、密教ならではの様式で設計しました。

ただし、空海は天長8年（831年）に病を發し、その翌年から入定まで高野山に隠棲したため、東寺伽藍の完成を見ることはありませんでした。

入定

天長8年（831年）、悪性の皮膚疾患を發症した空海は、天長9年（832年）から穀物を絶ち、高野山で坐禅三昧の日々を送ります。

そして承和2年（835年）、弟子達に遺告を与えた後、瞑想状態に入った（入定）と信じられています。

- ・『続日本後紀』によると、空海の十大弟子の一人、実恵の手紙には空海を茶毘に付した（火葬した）ことが記されていたようです。しかし後世になって「空海の顔色は変わらず、髪や髭が伸び続けた」という話が伝わり、空海は高野山の岩陰で永遠に生き続けているという「入定信仰」が生まれました。
- ・現在でも、弘法大師御廟には毎朝6時に食事が届けられ、維那（いな）と呼ばれる僧侶が世話をしています。御廟の中の様子は、維那以外は知ることができません。

この入定信仰こそが、高野山を永遠の聖地として発展させてきました。空海は、少なくとも実存主義的には、今も生き続けているのです。

真言密教とは

「高野山名所図会」
より抜粋しました

密教とは

密教とは、釈迦の教えを民衆に分かりやすく説こうとする大乘仏教（顕教）とは違い、閉ざされた師弟関係によって口伝される「秘密の教え」です。内面の世界で自己を破り、仏と合一することを目指すため、神秘主義の一種とも考えられます。

また、現世で生きたまま成仏ができる（即身成仏、瞑想したままミイラ化する即身仏とは違う）と説いていることも、密教の特徴です。

密教は、6世紀から7世紀にかけてのインドで成立しました。その頃のインドではヒンドゥー教が再び勢力を拡大していました。仏教はヒンドゥー教に対抗して信者を獲得するため、土着の信仰を取り入れ、特に呪術や儀礼を強調するようになりました。

初期の密教が取り入れた雑多な呪術はやがて整理され、「大日経」や「金剛頂経」として体系化されます。空海が唐で学び、日本に伝えたのはこのインド中期密教でした。

一般の人々は、顕教とは違って密教の教義はよく理解できなかつたものの、その神秘的な儀礼や恐ろしげな言葉に呪術的な魅力を感じていました。日本で密教が発展したのも、怨霊を恐れる平安朝の貴族たちが、加持祈祷の効果を期待したためです。

真言密教と天台密教

空海の真言密教とは別に、最澄の天台宗も密教を取り入れました。

もっとも最澄自身は法華経を中心とする総合仏教の確立を目指しており、密教はあくまでその一部に過ぎませんでした。そのため、空海と最澄の時代は、真言密教が天台宗の密教を圧倒していました。

しかしその後、最澄の弟子の円仁（慈覚大師・794年～864年）、円珍（智証大師・814年～891年）が唐で最新の密教を学び、日本に持ち帰ったことで、天台宗でも密教が重視されるようになります。そして円仁の弟子、安然（841年?～915年?）が「大日経」を中心とする密教教学の研究を進め、天台宗独自の密教を完成させました。

これ以降、真言密教は「東密」、天台宗の密教は「台密」と呼ばれ、日本における二大密教として発展していきます。

東密では、釈迦如来の「華嚴経」「法華経」よりも「大日経」「金剛頂経」など密教経典の方が優れているとしています。

一方で台密では、「華嚴経」「法華経」は、実践面では密教経典に劣るものの、理論面では同様に優れていると説きます。これは、そもそも中国の天台宗が法華経を根本経典としていて、密教を導入していなかったことに由来します。

また、東密では大日如来を最高仏とし、釈迦如来はその化身の一つに過ぎないと説きますが、台密では大日如来と釈迦如来を同一の仏としています。

つまり、天台宗が釈迦の教えを密教と同様に尊ぶのに対し、真言宗は密教に特化しており、密教至上主義ともいえるでしょう。